

2021年8月6日

日本原子力発電(株)

東海第二発電所 標準応答スペクトルの規制への取り入れに伴う地震動評価の
審査会合(7月30日)指摘事項について

資料 1-2 標準応答スペクトルを考慮した評価について(地震動評価)

No.	該当 ページ※	指摘事項
■地盤モデルの妥当性関連		
1	P3	PS 検層データの扱いに関し、既許可ではダウンホール法の結果を採用しているところ、今回はサスペンション法の結果を用いている点について、考え方を説明すること。
2	P4	減衰定数の同定に関し、今回、減衰定数の下限を考慮することに至った考え方を説明すること。
3	P6~10	同定解析の際、3つの地震による観測記録を用いているが、その妥当性については他の地震の記録でも検証すること。また、既許可の審査で用いた物理探査等の結果との整合性も確認すること。
■地盤モデルの既許可 Ss への影響		
4	P39~42	標準応答スペクトル用地盤モデルによる既往の断層モデル地震動評価への影響については、基準地震動への影響の観点から、基準地震動に選定しているケースに対しての検討結果を示すこと。
5	P43~45	標準応答スペクトル用地盤モデルによる Ss-31(留萌波)への影響に関し、保守性を考慮する前の地震動(解放基盤表面上において 598cm/s^2)の応答スペクトルも示すこと。
■模擬地震波について		
6	P12	乱數位相を用いた模擬地震波の振幅包絡線の設定で、M6.9、 $X_{eq}10\text{km}$ とした根拠を説明すること。
7	P14, 15	実観測記録の位相を用いた検討に関し、2011年茨城県北部地震の KiK-net 高萩の観測記録を選定した理由や、実際に位相として用いている佐藤他(2019)の基盤地震動の詳細について説明すること。
8	P20, 21	複数の手法として乱數位相、実観測記録の位相を用いた手法を選定した理由を説明すること。また、この2つの手法の中から、乱數位相の模擬地震波を採用するに至った考え方を詳細に説明すること。

以上